



蕉門切字十八箇條

口決

教句小切字の理を事

ひりしり切字の事と十八の事ありて和奇ふも  
 ち奇山としてのゆはあぬ例小物丸小とよき名を  
 あらふぬと童歌の心持と先事より言ふて月  
 己り分ふと事ありてなましして申右の記  
 語の也と名目重しとことと連音の用  
 小多へのこの地語乃安小多は新なる用いたがしあ  
 べし知る金しとこと切字の用しふとあふ列  
 してあふの後とらんは是とこと時と分し物と二  
 みとらんふ始りし決ありて二百一音の発しは  
 なまこりあふと切字なり果といふと或ハ一字の  
 偏とらふの字よの字の類とふあひい餘初  
 乃物字とらるるし一文字むり字の類と云  
 是か何種とことこの哉来ハ治定とらるは  
 迷入と悟り動けと静ふとふあふ相對のの  
 理なりとらるるの発句の切字とのことと字と定  
 る小は及びぬし耶といふと葉とと新哉来  
 の治定とらるるの理と初ぬんとあふ  
 つと発句の理とらるる十八の公儀は有敷  
 しして爰と割れの法し初えし我のふ  
 心切といひ申れ切といひ換移切といふ名  
 利とらるる詞と云はせ月信の切字はな  
 ちとらるる

心切

いふは心の靈りて心切ぬ不まて  
 心切て死ねるも心切を心切



心切

中切

後後切

いづれも心切りとて病ぬ可まて  
 何ぞ死ぬれどもかたきと蝉鳴  
 梅のこゝろは時移りての臘月  
 下もつゝいふあゝいよふ月の雲  
 世は後ふきあひわく小田のり屋  
 人しゝとて賞せし我は年をき  
 石人若目そ和弁連弁れ心を汲りし  
 三石といつれも新制されは世の衆儀小  
 ころの金さうり

二字切

二字切

二反切

三反切

石廻

小廻

大廻

玄妙切

押字

抱字

玄名

白讀

追若

即真

益囚

春とてうゝ氣もさうの春はあ  
 ありつゝこりけははるは秋のん  
 何の来れんも志をも白しれ  
 夕名之秋をいりてれ亂るは  
 鳴るを柳のちより初梅  
 四よりいりては入て鳴る海  
 忘れとらさよよの心は海  
 海着て鴨乃をさかのふは  
 秋風を打をてりあしき葉の枝  
 當飯より名れは墓乃董草  
 二京後もしむりては七を糸  
 むしつちき秋父りてお藤は  
 稻ゆふりよふをさし額紅友  
 路くもこり竹極りては葉と

昼囚

宿ゆの行よふをさし額紅髪  
路のよこしと竹極の口二葉と

五字

奈の七重七葉伽藍八重のう  
至教の二重麻せよあなみの山

名不

奇書よりその軍書ふなしは  
橋立は文珠の知りあはまき

右十八ヶ条ハ我々の客のふして化つぬ

射して穿牙變身とてへつと

如省式

十五ヶ條

才一 双関

千載集秋

表をとり秋をよみくく海と山

白馬戎

梅のしらき高きく立のほりりり

夕夕の朝外ははれ凡のむ

才二 互見

古今集秋

春庭をすまひいかりのよき

今とりりりり秋よりし今

柿のむふ首と志のふ斜渥のる

才三 生後

夏首

久しこれむりのとはきまはひふ

まのいさうくまんとららん

親雲の凡のぼくや混うりりこ

才四 顛倒

杜律

碧梧樓老鳳凰枝

あつとふの吹浦りもて夕涼み

才五 執中

かきつる鳥ふりかともまた

かほつらうくしあめとくま

西白し鳥くまならんをれぬ

才六 三鳥 古今集



才九 雜季

▲ 后凡也。櫛も燒火し埋火し。  
衾油もももろしてハ 雜

▲ 凡俗。裕。麻子。固。麻子。單。花。  
後。川。橋。部。ま。く。き。新

▲ 炊。毫。と。多。河。放。つ。し。野。花。い。  
季。少。し。雜。も。用。名。色。こ

才十 道理ト人理ト

▲ あり。香。ふ。の。何。こ。日。け。出。海。山。路

▲ 氣。凡。香。ふ。を。ふ。う。れ。ら。出。の。を

而之旭の陽ふゆてに徳と奈く兼ハ  
眞と虚をて世をかくせり是河天地の  
乃足し云へり

▲ 常。く。秋。伽。う。り。先。を。何。し。啼

常く云徳の埋成りてうりくん乃  
埋成

才十一

俗談平話

・ 誹。自。版。部。頭。院。袋。俗談

・ 去々年。明後日。白雲。平話

才十二 他言連語

・ 休。何方。有寒。庭。暮。黄昏

・ 面有味 此が他言連語と云ふの

才十三 旅行

▲ 花。咲。野。道。の。元。も。け。長。な  
是。こ。こ。と。知。り。後。の。日。取。と

▲ 浦。山。し。花。の。名。取。ふ。り。て。ま。り

▲ 是。こ。こ。と。知。り。後。の。日。取。と

才十三 旅行

▲花咲く野道の元もはるる  
▲是よこしとわらう後れ日敷と  
▲浦山と花の名残ふりてまら  
▲思ふとめづる衣人の利

才十四 雅言 俗語

○鳥波玉。久方。天津ノ。テニ。口ハ。チマカス

才十五 虚實

▲とれ母しとを是引くヲ源  
▲蓮の葉ふ小便もれハ此舍利ハ

▲佛とてはありてけテ浮身ぶくみなる小仲こな白皮はくひ  
▲佛とてはありてけテ浮身ぶくみなる小仲こな白皮はくひ  
▲佛とてはありてけテ浮身ぶくみなる小仲こな白皮はくひ  
▲佛とてはありてけテ浮身ぶくみなる小仲こな白皮はくひ

佛なりなり一休いっしゅう智ち

才十六 藤秘考此人ここの名なはは佛ぶつ字じ

三法

真 軒浮れ雪せいりり祢ねふりむ

州 振賣れ一ムむ衣いきなり夷い禱たう

行 いろはいろはとと君きみえふえふちち返かへ不ふ直ちき

四名

起 衣いききれれぬぬをを刷はらぬぬもも風かぜらられ

情 一いつつ凡ふんのの木きのの葉はをを吹ふくく

轉 股かのの筋すぢををぬぬららしし川がはをを解とけ

合 才さいのの葉はをを吹ふくく風かぜをを吹ふくく

四名

起

起 カキコト 起ぬる 起る

情

情 カキコト 情ぬる 情る

轉

轉 カキコト 轉ぬる 轉る

合

合 カキコト 合ぬる 合る

お格

遍

お格

序

お格

題

お格

曲

お格

流

お格

六義

風

雅

頌

賦

比

興

七名

有心

會叙

逢句

起情

向附

柏子

色立

八体

其場

其人

時分

時節

時宜

天想

觀想

面影

今も昔も浮き世の如し

其場

湯をうけ居る邊り

其人

此の世に在る人の如し

時宜

門松の如し

時宜

みりやうの義

天意

起るの如し

今もし浮せれ今もし

其場

湯より此岸に遊ばし

其人

ほりくとも此の角起り

時立

門松の雪も積る年暮

時立

みりやうも美意のし

天志

死をしのぶもふ

面影

意 帯にぬ千年の恨

夢 今も娘の姿

軍忠 柳の影も

身外

向附 若元は

白馬 二法

芳波とて

粉成

一考の念も

菟也剛ふ

勲儀

松紫乃

稚子満を

西白の

死活

扣る

貞外七名

く

有心

より

會釈

端の

多く

逢句

け

起情

立

乳ハ



○ 貞外七名句体

くらしのちかきとてふ秋の

有心 くらしのちかきとてふ秋の

會釈 清田初と秋のちかきとてふ秋の

逢句 くらしのちかきとてふ秋の

起情 立派な秋は秋とていふ秋の

向附 乳のちかきとてふ秋の

栢子 晩餅のちかきとてふ秋の

危立 所詮は秋のちかきとてふ秋の

石七名句体 爰

流りのちかきとてふ秋の

湯すみのちかきとてふ秋の

ゆかりのちかきとてふ秋の

とまきのちかきとてふ秋の

あつた

Handwritten text in a cursive script, oriented vertically on the right side of the page. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. It appears to be a signature or a set of initials, possibly including the name 'Wm. W. ...' followed by a flourish.



